キャンパス・コラム

若者の知恵に期待

3月は別れの季節であり、つぎの出会いへの準備の時でもある。ついこの間、高校出たての初々しい顔で入ってきた新入生たちが、明日からは社会人となる。新しい門出を祝って杯を挙げたい。

しかし、その前に考えておきたいことがある。私のゼミでは毎年『経済財政白書』を読んでいるが、2003年度の白書が取り上げていた問題の1つが「高齢化・人口減少」の問題である。「高齢化」は普通「少子化」とセットで取り上げられ、人口構成の変化という視点から論じられる。「高齢化」によって介護などの新しいビジネスが登場する一方、「少子化」によって幼稚園・保育園から大学まで、若年層を相手とするところは厳しい対応を迫られてきた。

これからの大事な問題は人口減少である。白書によると、少子・高齢化が急速に進む中で死亡数が出生数を上回り、日本の人口は2006年の1億2774万人をピークにして減少に転ずる。単なる人口構成の変化を超えた問題が現実化するのである。そして2050年にはおよそ1億60万人と、現在の8割以下になると予測されている。2050年といえば40年以上先の世界で不確実なことが多いが、今年大学を卒業する若者が高齢者の仲間入りをしていることだけは確かである。その頃には若者はさらに減少し、今以上の高齢社会になっているかもしれない。

人口減少は今後の景気に深刻な影響を与える。これまでは一時的に景気が後退しても、人口増加という基調があったために、長期的には経済は成長を続けた。しかし、これからは、人口とともに住宅需要や個人消費も減少し、放っておけばマイナス成長が定着する。われわれはこれまで考えもしなかった未知の世界に足を踏み入れるのである。

マイナス成長を甘んじて受け入れるか、それとも人口減少分を補うような新たな成長分野を見い出すか、これからの40年はまさに今社会に巣立つ若い人たちの知恵にかかっている。心から応援したい。

広報委員　袴田兆彦（商学部助教授）